

○宮田義昭 田野敬子 牧野正義\*

(ノートルダム清心女大人間生活, \*㈱ロツテ中央研)

【目的】本研究室のこれまでの調査から、咀嚼能力と高齢者の QOL には有意の関係が示唆されている。そうであるならば幼児期からの歯の健康の維持は一層重要になる。幼少児の「噛まない」「噛めない」「飲み込めない」は社会問題となって久しいが、今回は彼らの食生活環境、咀嚼能力およびそれらの関連の有無について検討した。

【方法】岡山市内の 5 保育園に通う園児 (3 ~ 5 歳, 男児 279, 女児 221, 計 500 名) およびその保護者を対象とした。保護者には子どもを取り巻く食生活に関するアンケート調査を、園児には口腔内状況を面接調査で、また咀嚼能力の評価をチューインガム法 (溶出糖量) および一部 G-1 ゼリー法にて行った。

【結果】保護者が調理することが、「好き」, 「嫌い」が 73.3, 26.7%。調理の際最も重視すること (6 項目から選択) では栄養価が 55.8%, 以下調理時間, 子どもの嗜好, 経済性, 料理数の順で、噛みごたえを挙げた者はいなかった。加工食品は「比較的使用する」, 「比較的使用しない」共に約 50%。外食は「度々」33.3, 「たまに」8.8, 「減多にない」57.8%。

幼児の口腔内状況は齶歯のある者 39.3%, 叢生歯を有する者 7.1%, 交叉咬合を有する者 1.8%, 歯間空隙の無い者 45.3%であった。平均咀嚼能力 (溶出糖量) は  $0.81 \pm 0.22\text{g}$  ( $n=440$ ) で 3 ~ 5 歳児間で有意差は認められなかった。高咀嚼能力群では 3 歳児で固形食への移行が「適切な時期に行われたと思われる」者 ( $p<0.01$ ), 「間食を時間・量共に決めて与えられている」者 ( $p<0.05$ ) の比率がいずれも有意に高く, 4, 5 歳児では外食を「減多にしない」 ( $p<0.01$ ) 家庭の幼児の比率が有意に高かった。